

第13回関西大学FDフォーラムを開催しました

6月27日、千里山キャンパスにおいて、第13回関西大学FDフォーラム(全国私立大学FD連携フォーラム後援、関西地区FD連絡協議会協賛)を開催しました。今回のフォーラムは「交渉学のFuture Design-交渉学を身体化する-」をテーマに、教員がそれぞれの授業において、その必要に応じて交渉学のエッセンスを導入することができることを目標に行いました。交渉学のメソッドロジーについて、具体的な例を用いてインストラクションを行い、その後「デモ授業」を実施した上で、解説を加える形式で行われました。

講師には一色 正彦氏(金沢工業大学大学院 知的創造システム専攻 客員教授他)をお迎えし、三浦 真琴(関西大学 教育推進部 教授)、山本 敏幸(関西大学 教育推進部 教授)、田上 正範(関西大学 非常勤講師)、追手門学院大学 准教授)、松木 俊明

(関西大学 非常勤講師、弁護士)がファシリテーターとしてサポートをしました。

採択されたAPにおいて、アクティブラーニングの成果をどのように可視化するかという課題に対し、「交渉学」の導入に着手してきました。ハーバード大学で培われた「交渉学」とは、これから社会に巣立っていく学生にとって、社会人基礎力の根幹をなす信頼関係構築に必要なコミュニケーション能力です。このコミュニケーション能力は学生のみならず、第一線で活躍する社会人の間でも学び直しで価値の見いだされている分野です。交渉学の基礎概念とその実践を様々な授業でマイクロインサージョンすることで、共通教養科目のみならず専門科目の分野でより人間性のある人材を輩出できることが期待されています。

講演では、交渉学の基礎概念について説



明があり、様々な基礎教養科目でどのように交渉学をマイクロインサージョンすればいいかについて、参加者と一緒に考えていきました。各グループによる話し合いでアイデアを共有し合い、全体で共有し、一色氏のフィードバック・コメントをいただきました。

講演会の内容につきましては、動画配信を検討中です。

“APAN ConferenceのWORKSHOP”に参加しました

2015年2月24日(火)より3月6日(金)まで福岡国際会議場にて開催された“APRICOT-APAN2015”に、関西大学教育推進部山本敏幸教授・同三浦真琴教授ならびにLA(Learning Assistant)の池澤智也氏が参加しました。APRICOT(Asia Pacific Regional Internet Conference on Operational Technologies)はアジア太平洋地域のインターネット運用技術者の知識・技術の向上を目的に開催される国際会議です。同じ地域内の学術ネットワークに関わる研究者の研究成果を共有し、課題を検討するのがAPAN(Asia-Pacific Advanced Network) Conferenceです。上記の三名は開催期間中

の3月2日(月)の午前の部においてワークショップ(WS)をおこないました。当WSは「臓器移植」を題材に、当事者の意志決定、関係者間での合意形成や相互の交渉を求められるいくつかのシーンをピックアップし、それぞれについて考えたり、その考えを共有あるいは検討したりする場を持ちました。LAの池澤智也氏はグ



ループワークのファシリテーターとして関与し、参加者からその力量を高く評価されました。参加者の一人、台湾大学医学部の江堤荘(Ti-Chuang Chiang)教授は、今回扱ったテーマの妥当性と意志決定や交渉に関するワークの意義と価値を絶賛され、台湾大学の医学部においても同様のWSを開催しました。



事務局より

平成26年に採択された「大学教育再生加速プログラム(以下「AP」という。)」の取組(「21世紀を生き抜く考動人(Lifelong Active Learner)の育成」)が開始して早くも1年が経過した。

この1年間には、AP採択記念シンポジウムの開催に始まり、複数回に亘る交渉学ワークショップおよびFDフォーラムの開催や、国内外大学の調査など、目まぐるしく活動を行ってきた。

私自身、今年の2月にハワイ大学(米国)に視察する機会をいただいた。およそ5日間で、11の施設お

よび各施設が行う教育活動についてヒアリングするという密度の濃い日程であったが、先方の教員を始め、職員の方々も実に好意的に迎えてくれた。

視察した中では、担当業務とも関連する「Institutional Research Office」の訪問が特に印象的であった。独自で開発されたIRオンラインシステムでは、学内の様々なデータが蓄積され、アクセス権限を持つ者(学部長レベル)は調べたい項目をピックアップすることで、瞬時にクロス集計結果を確認できる。このようなシステムの開発・運用に至

るまでには、周囲の理解など相当の苦勞を要したことは想像に難くないが、教員と職員が一丸となり、目標に向かう姿を目に焼き付けた。

私もAPの取組を通じ、本学の教育力向上に寄与することはもちろんのこと、自身も常に考動する関大人として成長し続けたいと思う。

また、学生も本取組を通じて様々なことを自ら知り、学ぶ体験を繰り返すことで、激動の21世紀を力強く生き抜いてくれることを願う。

(健)

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

E-mail: ap-info@ml.kandai.jp

教育開発支援センター <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

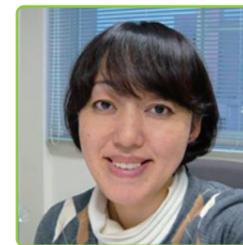
AP取組 Web サイト <http://www.kansai-u.ac.jp/ap/index.html>

発行日/2015年9月 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター



学生の学びを「見える化」するとは

教育推進部 准教授 森 朋子



本学の AP 事業「21 世紀を生き抜く行動人 <Lifelong Active Learner> の育成」が展開されてからもうすぐ 1 年が経とうとしています。事業においては、本学の教育理念である「学の実化(学理と実際の調和)」のもと、まさに思考と行動を調和することを具現化するために、交渉学を中心としたアクティブラーニングを推進しています。学生の顔つきが活動の深まりとともに変わる様は、まさにアクティブラーニングの大きな成果だと実感しています。

このような活動をさらに活発化するために、とても重要なのがその学びの「見える化」です。学生の顔つきが変わる = その学びの構造を知る、その学びのプロセスを知ることによって、その状況を多数の人数で共有することができます。個人個人の評価観点は違うので、その意味において、1つの見方をデータを添えて提供することが、この「見える化」の大きなメリットになります。本事業では様々なデータを分析しながら、どのように学生の学びをより立体的に表現するかについていろいろと検討を重ねているところです。

学生の学びを「見える化」するには大きく分けて2つの意味があります。いずれもメタ認知に関係することです。メタ認知を簡単に説明すれば、普段の自分を客観的に見る力、と

いう説明になるでしょうか。「見える化」はこのメタ認知を高めるツールとして有効です。そこで課題になるのは、誰のためのメタ認知か、ということです。1つは教育の主体のメタ認知です。学生の学びの状況がわかることで、その状況に合わせた内容に教育内容を合わせていくことができます。これはメタ教授といって、学生の「わかる」に寄り添う大事な教職員の能力です。でももっとも大事なのは、学びの主体である学生自身が、自らの学びの現状を把握するために活用することではないでしょうか。学びは与えられるものではなく、自ら構築するものであることを前提に、今の学びの現状を適切に把握できるツールとして学習成果の「見える化」を推進していく必要を感じています。

本事業では、学びの主体である学生が活用できる「見える化」を目指して、教学 IR とルーブリック評価の設計を行っています。自らの学びにおける長所と短所が明らかになれば、学内にある各種の学生・学修支援プログラムへの参加も高まるのではないのでしょうか。今後の本学の「見える化」活動にどうぞご期待いただき、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

部会からの報告/The DOTS部会

「The DOTS部会」では、考働力育成のための正課及び正課外プログラムを検討します。具体的には、①交渉学科目やクリティカルシンキング科目の開設及び運営、②交渉学ワークショップの企画・実施、③アクティブ・ラーニング型授業を行う教員の育成（セミナー・ワークショップの実施、教材開発など）を中心に行います。

第2回交渉学ワークショップを開催しました

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」採択の進捗・成果報告の一環として、6月27日に第2回交渉学ワークショップ「模擬記者会見で学ぶ“三方良し”」-交渉学の応用プログラム-を開催しました。この交渉学ワークショップは、学生と社会人が合同参加する「交渉学ワークショップ」で、交渉学のプランナー及びファシリテーターとしてのリーダーシップを涵養するために、高度なファシリテーションを実践している社会人をTAとしてお招きし、学生の交渉学のリーダーとしてのさらなる学びの機会を提供しました。

講師構成は、一色 正彦氏（金沢工業大学大学院 知的創造システム専攻 客員教授他）が全体進行担当を受け持ち、山本建氏（毎日新聞社 経営企画室委員他）がヒント講義：メディア記者からの視点を担当、佐藤 洋行氏（株式会社ブレインバッド他）がヒント講義：「ソーシャルメディアにおけるビッグデータの解析からの視点」を担当、松木

俊明（関西大学 非常勤講師、弁護士）がヒント講義：「リーガルな視点」を担当しました。様々な視点で模擬記者会見のケースを多次元、多視点から分析することで、学生と社会人が合同チームでディスカッションを通して模擬記者会見の準備を体系的に行うことができました。

ワークショップ終盤では、交渉学の授業のLAを春学期に行ってきた学生たちが企業側の役を演じ、対する記者役として、山本建氏、小松 良明氏（株式会社毎日放送 編成局ライツ業務部長）、毎日新聞記者他2名



日時：6月27日(土)13:00～18:00
場所：第2学舎3号館E301教室

による記者会見のデモンストレーションを本番さながらに行いました。その後、一色氏に当事者の言動とその根拠について解説をいただきました。

最後に、学生と社会人の合同チームがそれぞれチームでのディスカッションを踏まえて、各メンバーが役割を決め、ロールプレイシミュレーションで本番さながらの模擬記者会見を体験しました。

講演会の内容、模擬記者会見のデモンストレーションにつきましては、動画配信を検討中です。



第3回交渉学ワークショップを開催しました

8月1日、東京センターにおいて、第3回交渉学ワークショップ「広がるアクティブ・ラーニング～交渉学の挑戦～」を学生主体のイベント形式で行いました。狙いは、関東地区に在住の関西大学OB・OGの方々や、最近の大学生のアクティブ・ラーニングによる学びや交渉学スキルの修得状況に関心をお持ちの社会人の方々をお招きして、学生目線のポスターセッションにより情報共有を行うというものでした。

まず、それぞれの学生が担当するポスターの前で数分の説明プレゼンテーションを行った後、視聴者は回遊形式のフリースタイルでプレゼンターとディスカッションを行うことで、相互の見聞を広め、深めました。

学生コーディネーターは、池澤 智也（関西大学 政策創造学部 4年）、金田 有紗（関西大学 社会学部 3年）、増田 優奈（関西大学 文学部 3年）、大早 亜美（関西

大学 商学部 2年）、濱走 内記（関西大学 政策創造学部 2年）の5名が中心となり、計10名の学部生が担当しました。

午後の部は交渉学ワークショップを行いました。講師は松木 俊明氏（関西大学 非常勤講師、弁護士）と竹本 和広氏（関西大学教育開発支援センター研究員、金沢工業大学大学院 客員教授）に担当していただきました。交渉学の領域でのアクティブ・ラーニングをテーマに、社会人と学生の合同チームでプロジェクト・ベースド・



日時：8月1日(土)10:00～17:00
場所：関西大学 東京センター

ラーニング（PBL）によるアクティブ・ラーニングを実践体験しました。

午前の部の参加者は、社会人11名（一部上場企業より）、学生15名（追手門学院大学、金沢工業大学社会人大学院、神戸親和女子大学、東京富士大学、関西大学）でした。

午後の部の参加者は、社会人28名（金沢工業大学社会人大学院OBを含む一部上場企業や第一線で活躍する弁護士）、学生15名（追手門学院大学、神戸親和女子大学、関西大学）でした。



部会からの報告/教育・学修成果部会(TLA部会)

「教育・学修成果部会(TLA部会)」では、学修成果の可視化に向けた評価指標の開発や間接調査・直接調査を検討します。具体的には、①学修行動・到達度調査の項目検討・実施・分析、②コモンルーブリック開発及び開発に向けた調査、③学修コンシェルジュ育成のためのSD研修を中心に行います。

学修コンシェルジュ育成プログラムを実施しました

6月2日および9日、千里山キャンパスにおいて、学修コンシェルジュ育成プログラムを実施しました。

大学教育において、教育の質的転換が求められている中で、学生の学修成果が重視されるようになってきました。このような背景のもと、教務系職員もこれまで以上に学修支援者の役割が期待されていることから、学修支援能力向上を目的とした研修を実施しました。

研修当日は本学教育開発支援センターの教職員がファシリテーターとなり、2日間で計22名の教務系職員が参加しました。

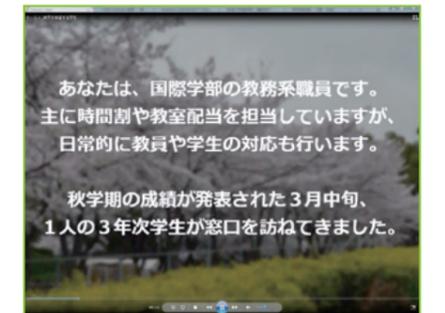
今回は「学生の休学相談」をテーマに、学生の意思決定支援やモチベーショ

ン向上について考えました。「答えのない」学生対応について、教務系職員それぞれが持つ経験知を共有し、議論し合うことにより、新たな知識・態度・技能を修得する場となりました。

グループワーク後は、学事局局長・次長・グループ長からの学生対応に関連するコメントがあり、熟達者の考えや態度を学ぶきっかけとなりました。参加者からは「職員として、学生に考えさせる“きっかけ”を作れる様にならなくてはいけない。そのためには、学生と対話する経験・学内他部署のサービスなどについての知識・社会人としての知識などを蓄えないといけない。」などの感想をいただきました。

日時：6月2日(火)、9日(火)9:00～10:30
場所：第2学舎1号館第1会議室

今後も、学生対応ケースの動画コンテンツを新たに作成していき、教務系以外の事務職員も参加できる内容の研究を行っていきます。



動画コンテンツの1シーン

入学時調査学内報告会を開催しました

6月24日、千里山キャンパスにおいて、今年度から実施しました入学時調査に関する学内報告会を開催しました。主に学部執行部の先生方を対象とし、50名を超える教職員に参加いただきました。

当日は全学部版の確定データ（単純集計データ）を披露するとともに、各

種データとのクロス集計の事例紹介をしました。今後は成績データやキャリア情報等を経年的に比較することで、より多面的な分析が可能になります。

講師である森 朋子先生からは「直接評価と間接評価の多様なデータを活用することで、学生の学びのプロセスをより立体的に、かつ、妥当性が高い

日時：6月24日(水)12:15～13:30
場所：尚文館「マルチメディアAV大教室」

ものにしていきたい」との説明がありました。

今回の学内報告会をきっかけに、各学部との連携をさらに深めるとともに、教学上の計画立案や意思決定等に資するデータを組織的に収集・分析・活用する活動を積極的に推進していきます。

初年次教育アンケート調査を実施しました

初年次教育の取り組みについて、その実態把握・効果査定等を目的とした、担当の先生方へのアンケート調査を実施しました。本アンケートは、初年次科目で扱われるアカデミックスキル（①プレゼンテーション、②レポート作成、③ディベート、④情報収集、検索、図書館利用、⑤リーディング、⑥専門基礎の習得）について、どのような学習活動が行われているのか調

べるものです。具体的には、アカデミックスキルを学生に習得させる上で重視している視点やアカデミックスキルの学習活動において扱われるテーマ・教育方法・評価のあり方、さらにルーブリック（評価観点の段階レベルを文章で示したもの）の活用について明らかにします。

集めたデータは、学会発表での活用や紀要『関西大学高等教育研究』へ

の投稿等を通して先生方への結果のフィードバックを計画しています。また初年次教育を通じた学生の学びの成果を検討する際の、評価観点・規準づくりの基礎資料として取り扱うとともに、教育プログラムや研修を実施する際に活用します。

アンケートの効果的な運用と活用を通して、よりよい初年次教育環境・内容づくりに邁進していく所存です。